若者よ、イノベーションを起こせ

佐藤健人
論説委員
株式会社大林組
代表取締役副社長執行役員

国土交通省各地方整備局と日本建設業連合会（日建連）との意見交換会が2020（令和2）年5月14日から6月9日の間、9回にわたって実施され、6月18日の本省との意見交換会をもって終了した。今年度は新型コロナウイルス感染症対策のためWeb会議で実施され、意見交換会のテーマは以下のとおりであった。

表 意見交換会のテーマ

働き方改革・担い手確保への取組み	(1)週休二日の実現に向けた環境整備
	(2)適切な工期設定と工程管理
	(3)建設キャリアアップシステム（CCUS,労務費見積尊重宣言）
建設産業の生産性向上（i-Constructionの推進）	(1)コンクリート工の生産性向上（プレキャスト活用の促進）
	(2)業務の効率化

今年度の意見交換会では、これらの他に、具体的なテーマ設定をしない「『ブレイクスルー』するためのアイデアについてのフリートーキング」も実施した。その中で、「技術開発」のあるべき姿あるいはありたい姿について、国土交通省、日建連双方からさまざまな意見交換がなされた。

私たちゼネコンの技術者が会社の中で進めている「技術開発」においては、現場あるいは顧客のニーズを発想の起点として、仮説レベルの事業の絵姿を自ら考え、その絵姿を実現する技術を開発するというのが普通のプロセスである。もちろん、このプロセスで何も問題はないが、私は予てから、技術開発がニーズを起点としている限り「イノベーション」は起きないと思ってきた。

私は、10数年前に「30年後の社会がどんな姿であって欲しいか」という視点から技術開発テーマを新規に立ち上げたチームとして探った。その時にイメージした社会は、一言でいえば「持続可能な社会」である。当時は「SDGs」という概念はなかったが（「SDGs」は、2015（平成27）年9月の国連サミットで採択されたもの）、「持続可能な社会」という言葉はあった。

チームとして様々なありたい姿をイメージすることはできたものの、結果としては時間的な制約の中で「それを実現するためにはどんな技術があればいいか」という技術主導型で議論を進めてしまったため、「イノベーション」はおろか「ブレイクスルー」するような開発テーマを見つけることすらできなかった。

ゼネコンという事業会社の中では、事業と無関係の市場性の低いテーマに取り組むことは困難である。しかし、同じ轍を踏まないためにも、ニーズからの発想ではなく、従来の枠を取っ払い、自由な発想で、もっとワクワクするようなテーマに取り組むことが「ブレイクスルー」には必要なのではないか。当社の「宇宙エレベーター」建設構想は、施工中の東京スカイツリーが完成するにあたり、スカイツリーにとどまることのない究極のタワーを考えようということから着想した。この「宇宙エレベーター」建設構想は、比較的その発想に近いが、私たちの生活にもっと身近なところで「イノベーション」を起こせないだろうか。例えば、1976（昭和51）年に個人向けパソコン「AppleI」を発表して以降、音楽プレイヤー iPod、音楽サービス iTunes、スマートフォン iPhone と、次々に社会に革命を起こしてきたApple のように。自動車というコア事業を軸に、様々なモノやサービスがつながる「コネクティッド・シティ」や、移動を一つのサービスとして捉えてシームレスにつなぐ新しい概念「MaaS」に取り組んでいるトヨタのように。

将来を担うのは、若い技術者である。私たちがやり残したことを彼らに成し遂げて欲しい。だからといって、私たちがとやかく指示を出しては、彼らは「イノベーション」を起こせない。若い技術者たちには、「5年後、10年後、20年後の社会がもっと暮らしやすくて豊かである」という希望と信念をもって、夢のある仕事に取り組んで欲しいし、そのための環境を作ることが私たち世代の役目であると考えている。